



第 110 号

西島 秀向
前 KCCN 理事
京都府生協連会長理事

チャット GPT の行方

オープンAIというアメリカの企業が開発した質問に対話形式で答える生成型人工知能「Chat GPT」のことが気になってしょうがない。Generative Pretrained Transformer という、事前にインターネット上にある膨大なデータを学習しておいて、質問に対する回答を探しながら生成する人工知能(AI)ということのようだ。

チャットとはネット上で会話をすることだが、この場合は、AIを相手に対話することになる。「深層学習」というやり方で、言語、画像などの膨大なデータをAIに学習させることができるようだ。生成AIなどと略されることもある。

このチャット GPT の行方が、非常に気になるのだが、筆者はシステムの詳しいことはわからないので、この5月の京都新聞の報道の一部を参考に紹介することで、プラス面と懸念を紹介したい。

4月30日に G7のデジタル相会合が閉幕したという記事。AIの活用と規制のバランスという難題への対応が途上のまま閉幕した。活用と規制の両面を紹介。チャット GPT は、人間のように受け答えを重ねると、違和感のない文章を作成するので、長文やレポートの要約が得意なので、いろいろな分野で活用できる。一方、回答に誤りや、差別・偏見が含まれることがある。また、学生が使うと考える力がつかないのではないかと。個人情報や大量に収集し、漏洩する危険があるのではないかと。イタリアでは、そのことを理由に一時使用禁止を発表したという規制の面を紹介。AIとの付き合い方が問われているとまとめられている。

5月18日の報道量がすごい。G7が19日から広島で開催されるという関係もあり、6つの記事が掲載された。

1件目:オープンAIの最高経営責任者サム・アルトマン氏がアメリカ上院の公聴会で一定以上の能力を持つAIの開発は免許制とし、安全基準を新設したうえで、クリアしていることを保証する機関の設立を提案した。

2～4件目:G7関連。G7で年内に見解を集約していく。個人情報流出や、偽情報拡散への対策、著作権保護の在り方などが課題であるが、各国の対応に温度差があり、議長国日本のかじ取りが注目されている。国連のグテレス事務総長は、AIを使って人間の判断に基づかず攻撃する兵器の開発を「全く容認できない」と強調し、規制を訴えた。「AIが人間の脅威となることなく、人々の幸福のために役立つような環境づくり」が必要だと語った。

(次ページへ続く)

5件目:新聞協会は、次のような意見書を発表AII による記事の無断かつ無秩序な利用が既成事実化すれば、報道機関が良質な記事を提供し続けることが困難になり、国民の知る権利を阻害しかねないと懸念を表明。

6件目:論考2023「生成AI,見えた課題」「自調自考」(自分で調べて自分の頭で考える)は教育の基本。作られた回答のウソを見抜けるか。新しい技術は私たちの生活を便利にするのと同じくらい、社会の不平等や環境リスクなど新しい問題を発生させる。自分で調べ、考えるべきことは増えることがあっても減ることはなさそうだ。

5月20日1件目:G7広島サミットは、人間中心の信頼できるAIの構築を掲げ、国際的なルール策定に向けて協議する「広島 AI プロセス」を進めることで合意。

2件目:オープン AI は、チャット GPT のスマートフォンアプリの提供を米国で始めた。

5月21日、浜矩子氏の論説記事。天眼「Gは何でPは何でTは何か？」ルーマニア政府がAIをアドバイザーとして採用したことで新たなジョークが生まれたとのこと。「我が国の政府がようやく知能を持つに至った。」日本政府のこのような気がすると結ばれている。

これらの報道を読んで筆者が思い出したのは、手塚治虫のマンガ「鉄腕アトム」である。ロボット法というものがあり、ロボットは人間を傷つけてはいけないという条文があった。アトムも人間の愚かさにあきれながらも人類を助けるというストーリーが多かったように思う。その中に、巨大なコンピューターが出てきて、暴走して人類を危機に陥れるが、アトムが活躍し、人類を救うというようなストーリーがあったと思う。そんなことは夢のまた夢、ずっと未来のことだろうと思ってきた。ところが、チャットGPTは、使い方を誤れば、ほんとうに人類を危機に陥れるのではないかと思える。

最先端技術というのは、巨大な研究機関で開発され、一定の規制の下にさらなる研究が進められるとなんとなく思っていたが、このチャット GPT は、システムに詳しくない者も、悪意を持っている者も利用できてしまうし、利用することがAIにさらに情報を与えて、学習させてしまう。その積み重ねがどんな結果を生み出すのかを想像すると、とても怖いと思ってしまう。

そこまでの重大な危機でなくとも、音声認識・生成もできるということで、家族や知人の音声データがあれば、その人の声に似せるように声色が変換できるというのを、TV 番組で紹介していた。悪用される懸念は尽きない。個人情報を入力などをしないよう気を付けて活用しつつ、しっかりと行方を注目していきたい。

(2023年7月)